中国研究集刊　重号（第六十八号）　令和四年八月　六七―七九頁

北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係

福田哲之

一　『蒼頡篇』の分章

『漢書』芸文志（以下、『漢志』）によれば、『蒼頡篇』は当初、李斯作の「蒼頡」七章、趙高作の「爰歴」六章、胡毋敬作の「博学」七章の合計二十章からなるテキスト（以下、二十章本）であったが、漢代に入って閭里書師が「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇を合わせ、一章六十字に区切って、全五十五章からなるテキスト（以下、五十五章本）に改編し、『蒼頡篇』と総称したことが知られる（注1）。

これを漢簡『蒼頡篇』に徴すると、漢牘『蒼頡篇』（以下、漢牘本）は、一章六十字の一定した形式をもち、閭里書師の改編にかかる五十五章本の系統に属することが知られる。これに対して、北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』（以下、北大本）は、残存簡に見える章字数が百四字から百五十二字と一定せず、五十五章本とは分章を異にするが、全体の章数が知られないため、二十章本との関係は不明である。

筆者はさきに漢牘本の章序について検討を加え、五十五章本の分章の実態を明らかにした（注2）。一方、北大本の分章については、資料上の制約から、いまだ不明な点が多く残されている。私見によれば、北大本の分章復原にあたって、本文と書写形式との両面にわたる漢牘本との比較分析が重視される。ただし、両者は残存状況が大きく異なり、しかも漢牘本には、板の字迹が薄れて釈読が困難な例や原釈に再検討を要する例が少なからず見いだされるため、現時点では両者の本文の実態を異同の詳細にわたって把握することは困難である。そこで本稿では、北大本の分章復原の前提となる両者の本文の対応関係を中心に検討を加える。

本稿における北大本の引用は、整理者の朱鳳瀚氏の釈文（以下、北大本原釈）（注3）、漢牘本の引用は、整理者の劉桓氏の釈文（以下、漢牘本原釈）（注4）にもとづき、諸家の見解および私見によって校訂を加えた本文による。また漢牘本の章序については、前稿で提示した修正に従い（注5）、漢牘本原釈と異なる場合は、章号の下に原釈の章序を（　）で示した。なお、北大本・漢牘本の引用に用いる字体は、必ずしも厳密な隷定ではなく、便宜的に通行体に従う場合があることを、あらかじめ断っておきたい。

二　書写形式の相違

本文の関係を見ていく前に、まず両者の書写形式を確認しておこう。『蒼頡篇』は四字一句、二句一韻（二句目の句末字が押韻）を基本とし、北大本と漢牘本とは、分章の相違に対応した異なる書写形式をもつ。以下、北大本、漢牘本の順に模式図を掲げ、（一）一簡（板）の字数、（二）章字数、（三）章題の順に要点を記す。

［図1］北大本　例：AB章　一章百四字（●は押韻字を示す）

A	AB○○、○○○●。○○○○、○○○●。○○○○、
B	○○○●。○○○○、○○○●。○○○○、○○○●。
	○○○○、○○○●。○○○○、○○○●。○○○○、
	○○○●。○○○○、○○○●。○○○○、○○○●。
	○○○○、○○○●。○○○○、○○○●。○○○○、
	○○○●。　百四

第1簡
第2簡
第3簡
第4簡
第5簡
第6簡

（一）一簡の字数

本文は竹簡の片面に一行、章の末尾簡以外は一簡に五句二十字、末尾簡（現存十枚）は章字数に応じて一句（四字）から五句（二十字）までのいずれかの句（字）数が書写される。編縄は上・中・下の三縄であり、満写簡では、上は第一句の上部、中は竹簡の中央にあたる第三句の二字目と三字目との間、下は第五句の下部にそれぞれ編縄痕が認められる。

（二）章字数

各章の末尾には章の字数が記される。章字数を記した章末簡は十枚残存する。それらを字数の順（少→多）に整理してみると、以下のごとく百四字（二十六句）から百五十二字（三十八句）までの七つの八の倍数によって占められており、各章は偶数句で構成され、章の本文の末尾字はすべて韻脚と見なされる。

「百四」簡58、「百一十二」簡37、「百廿」簡72、「百廿八」簡26・簡31・簡77、「百卅六」簡52、「百卌四」簡45、「百五十二」簡7・簡67

（三）章題

各章は冒頭の二字を章題とし、各章の第一簡と第二簡との上端部にそれぞれ第一字、第二字が標記される。残存する章題は、竹簡の缺失により第一字が不明の三つを含めて以下の十一である。

「□禄」缺簡・簡1、「漢兼」簡8・簡9、「闊錯」簡12・簡13、「幣帛」簡27・簡28、「□悝」缺簡・簡32、「齎購」簡42・簡43、「顓頊」簡46・簡47、「室宇」簡53・簡54、「雲雨」簡59・簡60、「□輪」缺簡・簡63、「鶡雉」簡68・簡69

［図2］漢牘本　例：第一章（奇数章）、第二章（偶数章）

第一	○○○○、○○○●。○○○○、	第1行
	○○○●。○○○○、○○○●。	第2行
	○○○○、○○○●。○○○○、	第3行
第二	○○○●。○○○○、○○○●。	第1行
	○○○○、○○○●。○○○○、	第2行
	○○○●。○○○○、○○○●。	第3行

（一）一板の字数

本文は各板の片面に三行、一行五句二十字、三行で合計十五句六十字が書写される。即ち一板が一章にあたり、全体は五十五枚の板によって構成

されたと見なされる（注6）。

（二）章字数

各章の字数は六十字で統一され（注7）、章字数は記されない。

（三）章題

各板の上部に朱を施し、中央に「第」字を冠した章の通し番号が墨書され、その下に連結用の穴が穿たれる。

三　本文の対応関係

北大本と漢牘本との本文を比較すると、北大本の原釈が挙げる七十九簡のうち七十六簡が漢牘本と対応する（末尾［別表］参照）。漢牘本の各板（章）と対応する北大本の本文については、すでに劉桓氏（注8）が逐一提示しているので、ここでは具体例として、北大本簡3―簡4―簡5の本文とそれに対応する漢牘本第四の本文とを対照して掲げ、両者の関係を確認しておこう（傍線は異同のある文字）（注9）。

疢痛遫玅。毒藥醫工、抑按啓久。嬰但掔援、何竭負戴。　北大本簡3

疢痛遫玅。毒藥醫工、抑按開久。嬰但掔紲、何竭負□。　漢牘本第四・第一行

谿谷阪險、丘陵故舊。長緩肆延、渙奐若思。勇猛剛毅、　北大本簡4

谿谷阪險、丘陵故舊。長援肆延、奐渙若思。勇猛剛□、　漢牘本第四・第二行

便走巧亟。景桓昭穆、豐盈爨熾。嬛蓉蜎黑、婉婤款餌。　北大本簡5

便走巧亟。景桓昭穆、豐滿爨熾。蠉蓉蜎黑、婉媚款□。　漢牘本第四・第三行

異同のある文字（残缺字を除く）とその韻部を、順に通し番号を付して列挙すると、以下のごとくであり（上が北大本、下が漢牘本）、②③④⑤は声符を同じくする同部韻、①⑥は陰声間における異部合韻の通用関係をもつ（注10）。

①「啓」脂部―「開」微部　②「緩」元部―「援」元部
③「渙」元部―「奐」元部　④「奐」元部―「渙」元部、
⑤「嬛」元部―「蠉」元部　⑥「婤」之部―「媚」幽部

同様の状況は他の対応本文にも見られ、字迹の薄れや残缺などにより釈読困難な文字や、釈読に検討の余地のある文字を除けば、両者の本文は基本的に共通し、異同のある文字もそのほぼすべてに通用関係が認められる。

さらに注目されるのは、漢牘本と北大本との相互の缺失部分における整合性である。前稿で提起した漢牘本の章序に従えば、両者には後述する最終章の末部を除いて、

・漢牘本に存在して北大本に見えない本文の字数と、北大本の書写形式から想定される缺失本文あるいは缺失簡の字数とが符合する。
・北大本に存在して漢牘本に見えない本文の字数と、漢牘本の書写形式から想定される缺失本文あるいは缺失板（章）の字数とが符合する。

のごとき対応関係が認められ、残存する本文の順序や韻脚の位置についても齟齬は見いだされない。

四　対応本文が漢牘本に見えない北大本

ここで問題となるのは、北大本の七十九簡のうち対応する本文が漢牘本に見えない三簡、即ち簡77、簡78、簡79である。これらはいずれも残簡であり、はじめの二簡については、簡78+簡77の順に綴合することが陸希馮氏

によって指摘されている（注11）。釈文は以下のとおりである。

北大本簡78+簡77

𢀖𢀖鬱[奐]、□□[賣]𨻶。　百廿八

簡77は竹簡の上部を缺失して下端も完存せず、残存する本文六字も左側を缺損するが、末部の「百廿八」の章字数から、本簡は章末にあたり、当該章は一枚に五句二十字を書写した満写簡六枚と、二句八字を書写した末尾簡一枚（即ち簡78+簡77）の計七枚の竹簡で構成され、簡77の上部の缺失部分には二字が存在し、末尾の残缺字は韻脚にあたることが知られる。王先虎氏が残存部分から推定するごとく（注12）、該字は「𨻶」と見られ、鐸部に属する。北大本には他に鐸部の押韻字は確認されていないが、ここで想起されるのは、前稿で指摘した漢牘本第廿一（原釈第一一甲）の第十句「嘆詨噍慕」の句末字「慕」の釈読にかかわる問題である（注13）。

漢牘本第廿一（原釈第一一甲）は「爰歴」に属し、原釈に従えば、韻脚にあたる第十句の句末字「慕」が鐸部（注14）、同板（章）中の他の六箇所の押韻字（「屠」、「夸」、「夫」、「豬」、「且」、「拏」）はいずれも魚部に属する。漢牘本の他の「爰歴」中の本文の韻脚もすべて魚部に属しており、この「慕」字は「爰歴」における魚鐸合韻部の存在を示す貴重な例と目された。ただし、図版を見ると当該字は字迹が不鮮明で釈文を確証し得ず、魚部に属する別字の可能性も残ることから、前稿では取りあえず検討の対象から除外し、今後の課題とした。

先の検討を踏まえれば、北大本簡78+簡77は「爰歴」中の章の末尾簡にあたり、鐸部に属する韻脚の「𨻶」字は、魚鐸合韻部の存在を裏付ける新たな証拠と見なされる（注15）。

次は簡79である。まず釈文を挙げる。

北大本簡79

……□渠波[水]

図版によれば「水」（微部）は、満写簡（五句二十字）の末尾の句末字と見られる。しかし残存字数の制約から、韻脚であるか否かが知られず、現時点では簡79が「蒼頡」「爰歴」「博学」のいずれに属するかについても不明とせざるを得ない。

それではこれらの三簡に対応する本文が漢牘本に見えない理由をどのように考えればよいであろうか。漢牘本は全五十五章のうち、第八、第九、第廿二、第廿七、第廿八、第卅二、第卌一、第卌二の八章に該当する板が見えず（注16）、北大本の本文との対応も確認されていない。また残存する板のなかにも摩滅や缺損により本文の一部が不明なものが少なからず存在する。こうした状況を踏まえれば、北大本簡78+簡77および簡79に対応する本文は、漢牘本の未見の板あるいは未釈部分に属する蓋然性が高いと考えられる。

五　漢牘本と北大本との句読の異同

本文に関してもう一つ留意されるのは、漢牘本と北大本との対応本文の中に、句読が異なると見なされるものが二例認められることである。以下、個別に検討を加えよう。

一例目は、北大本簡65と漢牘本第十（原釈第五四）とに見える対応本文である。まず釈文を掲げる（漢牘本の傍線部は北大本との対応部分）。北大本簡65の句読は原釈に従う。

北大本簡65

……墨堯舜、禹湯毅卬。趮蟨瞵盼、

漢牘本第十（原釈第五四）第八句～第十三句

菅（管）晏孔墨、堯舜〔禹〕湯。毅□卬躁□次、瞵盼范喪。頎碩疑化、蚩尤典明。

秦樺林氏、胡平生氏は水泉子本暫045を根拠に、「卬」（陽部）を韻脚とする北大本簡65の原釈の句読を誤りとし、その二字前の「湯」（陽部）を韻脚とする句読に修正する（注17）。この見解は、その後、漢牘本からも裏付けられたが、北大本の句読については、なお検討すべき問題が残されている。

前述のごとく、北大本は満写簡の場合、一枚の竹簡に五句二十字が書写され、簡の末尾字は句末にあたる。これによれば簡65は末尾の「趮蟨瞵盼」で一句をなし、その前の「禹湯毅卬」の「卬」が韻脚となる。即ち原釈の句読は北大本の書写形式に従うものであり、水泉子本および漢牘本との異同の原因については、慎重な検討が必要とされる。

それではあらためて両者の本文を見てみよう。まず内容面では、簡65の「堯舜」の上の文字は残缺部分から漢牘本と同じく「墨」字であったことが明らかである。四字句の多くが同義類義字で構成される『蒼頡篇』の特色を踏まえれば、簡65の「□墨堯舜、禹湯毅卬」の句の構成は不自然であり、漢牘本「菅（管）晏孔墨、堯舜禹湯」のごとく前句は諸子、後句は聖王という組み合わせで名詞の二句が形成され、その後に「毅卬趮蟨、瞵盼范喪」という非名詞の二句が続いたと見る方が合理的である。また押韻面でも漢牘本の句読では「湯」字、「喪」字はいずれも陽部に属して、章内の他の韻脚と整合するのに対し、北大本の句読では「卬」字は陽部に属するものの、後文の韻脚にあたる「碩」は鐸部に属し、章内の押韻および前後の章との接続にも齟齬をきたすことになる。

同様の状況は、もう一つの例である北大本簡74・簡75にも認められる。

北大本簡74……＋簡75

陝邮宮……郡邊……

漢牘本章序不明（原釈第四〇（乙））第一句～第七句

盩底𠬝□（注18）。犨昚愧邦、阝陝邨鄜。券□阝區阨、阝邯竈邘。郡邊泖濮、崩予落觚（注19）。

簡74は竹簡の上端が残存し、北大本の書写形式によれば冒頭の「陝」字が四字句の第一字にあたり、「陝邮宮□」で一句をなすことになる。一方、漢牘本第四〇（乙）では、「陝」字は四字句の第二字にあたり「阝陝邨鄜」で一句をなす。漢牘本の図版を見ると「陝」字は明瞭であり、その上の文字は薄れて判読しがたいものの、左偏の「阝」は確認することができる。漢牘本によれば、この句は一句四字中の前の二字が〝こざとへん〟（阜）、後の二字が〝おおざと〟（邑）のごとく二字単位で共通の偏旁をもつ。こうした例は『蒼頡篇』中に多見され、さらに漢牘本の句読は、板全体の書写形式や前後の本文とも整合する。これに対して、北大本の句読に従った場合は、句式・押韻に齟齬をきたすことになる。

ただし以上の分析は、簡65および簡74、簡75の前後の缺失部分が漢牘本と同様の本文であったとの前提に立つものであって、缺失部分の本文が異なる可能性についてもなお考慮の余地があろう。この点から注意されるのは、北大本には漢牘本第十（原釈第五四）および漢牘本章序不明（原釈第四〇（乙））と対応する本文をもつ竹簡が、簡65および簡74、簡75以外に見いだされないことである。句読の異同と本文の缺失との関連性の有無について

は、今のところ不明とせざるを得ないが、先に示したごとく簡65および簡74、簡75の本文は、句読の異同という点を除けば漢牘本と完全に対応しており、他の北大本の竹簡にも異文の存在をうかがわせるような痕跡は見いだされない。こうした状況を踏まえれば、これらの句読の異同は、漢牘本との間に非対応関係をもつ異文の存在を示唆するものではなく、誤写による本文のズレに起因する可能性が大きいと考えられる。

六　最終章の本文の問題

前章までのところで、漢牘本のなかに対応する本文が見えない北大本の三簡、および北大本と漢牘本との間に句読の異同が認められる二例について検討を加え、これらはいずれも両者の本文の対応関係を否定する根拠とは見なされないことを明らかにした。続いて本章では、総字数と句式構成との関連から、最終章の本文の問題を取り上げる。

『漢志』が「斷六十字以爲一章、凡五十五章」と記すごとく、五十五章本の総字数は三千三百字（六十字×五十五章）であり、これを八で除すると四百十二余り四となり、最終章の第五十五章末尾は奇数句で結ばれたことが知られる。一方、前述のごとく、確認される北大本の章字数は百四字（二十六句）から百五十二字（三十八句）までの八字（二句）単位の七つの字数からなり、各章は韻脚をもつ偶数句で結ばれたと見なされる。

仮に北大本の最終章が五十五章本と同様、奇数句で結ばれていたとすれば、最終章のみを奇数句にしなければならなかった理由について、合理的な説明を加えることはおそらく困難であろう。しかし逆に、閭里書師がもともと偶数句で結ばれていたテキストを一律一章六十字に改編した結果、形式上奇数句での終結となる最終章の第五十五章の字数が不足し（上掲［図2］参照）、末部に奇数個の句を加増して六十字に調整したとすれば、五十五章本が奇数句で結ばれるにいたった理由はきわめて自然に了解される。北大本と五十五章本との分章形態上の先後関係という点からも、後者の蓋然性は高いと見てよかろう（注20）。それでは果たして漢牘本の最終章には、加増の痕跡は認められるであろうか。

ここで注目されるのが白軍鵬氏の見解である（注21）。白氏は北大本の章字数の分析から五十五章本の加増に論及し、その具体例として漢牘本原釈第五三乙について以下のごとき分析を加え、原釈第五三乙の末尾五句が漢人の加増にかかる可能性を指摘している。

> 第〝五十三乙〟板，前面十一句屬於我們一般所説的〝羅列式〟，而後面四句則爲〝陳述式〟，陳述式的部分爲〝盡得所求，延年益壽，上下敖游，兼吞天下。〟從内容上看非常簡單，沒有難字，而上面十一句〝羅列式〟中則頗有筆畫繁複的文字。因此我們可以斷定此板中的前十一句應當屬於〝二十章本〟中的一章結尾，而後面五句，若按常理來看，則當爲其它章的開頭内容。但是其實也存在其爲〝閭里書師〟所加的可能。首先就是其内容比較簡單，與我們已知的《蒼頡篇》的形式大多不類；而其中的〝上下敖游〟〝兼吞天下〟分别與〝二十章〟本的〝游敖周章〟及〝漢兼天下〟多字重複，那麽其屬於漢人所加的可能性是很大的。〝延年益壽〟一句廣泛出現於漢代瓦當、磚文及鏡銘中，似乎也體現了漢人的思想。

一方、敢告可于氏は漢牘本の原釈第五三乙が最終章の第五十五章に該当することを指摘した上で、末尾の「兼吞天下」を閭里書師により加増された文字と見なしている（注22）。

另外，〃延年益壽，上下敖游〃是一個完整的句子，後面又加了〃兼吞天下〃，似乎與每八字爲一句不合，并且也不押韻。但這正説明多出的〃兼吞天下〃是閭里書師爲了〃斷六十字以爲一章，凡五十五章〃而加上的四字。

それでは両氏の見解について考察を加えよう。白氏は第一句から第十一句までが羅列式であるのに対し、第十二句以降は陳述式に変化することに注目し、陳述式の末尾四句（第十二句～第十五句）を加増部分と見ている。しかし、これでは加増前の最終句も末尾字が押韻しない奇数句で結ばれていたことになる。一方、敢告可于氏の見解は末尾が偶数句である点では妥当と言えるが、白氏が指摘するごとく、末尾の二句「延年益壽、上下敖游」には、漢代の吉祥句や既出（漢牘本第十二章第一句）の本文「游敖周章」との文字の重複が見え、この二句も後の加増にかかる可能性が大きいと考えられる。

そこで本稿では、両氏の見解を踏まえた上で、加増前のテキストにおいても章（篇）末に何らかの結尾を示す表現が存在した可能性を考慮し、以下のごとく、第十二句「盡得所求」が最終句にあたり、［　］で括った三句を加増部分と推定したい。

第五十五（原釈第五三乙）

緇纕紅綃、練縷素縵。氂鑠膠釦、帷募虚殺。弦韇鞄袋、
皮韋革鞣。屬廢剡謀（注23）、縱聒旋保。縠韃斷豕、撟扶輦陶。
令次睢徧、盡得所求。［延年益壽、上下敖游。兼吞天下、］

七　漢牘本原釈四二および原釈四三甲の章序

これまでの検討により、北大本と漢牘本との最終章の末部を除く本文には、対応関係が認められることを明らかにした。最後に両者の関係にもとづき、前稿で保留した漢牘本の原釈第四二および原釈第四三甲の章序について、あらためて検討を加える。

この両章は韻脚の韻部から「博学」に属することが知られ、北大本簡40によって接続が裏付けられるが、押韻の形式を見ると、原釋第四二が奇数章のA型、原釋第四三甲が偶数章のB型に属し、原釈の章序と押韻形式との間に齟齬が認められる。従って原釈第四二、原釈第四三甲は、それぞれ「博学」中の連続する奇数章、偶数章に修正される必要があり、この条件にあてはまる章として以下の二案が提起される。

第一案　原釈第四二 → 第卌一、原釈第四三甲 → 第卌二

第二案　原釈第四二 → 第卌三、原釈第四三甲 → 第卌四

図版を見ると、原釈第四三甲は板首の章数部分が残缺して確認できないが、原釈第四二にはうっすらと長横画が残存する。筆者が最初に復旦大学出土文献与古文字研究中心網に発表した初稿では、この長横画の位置から当該字を「三」と推定し、第二案を提起した（注24）。これに対して、敢告可于氏は第一案を提起している（注25）。筆者はその後、前稿を発表したが、その段階では第二案を立証する明確な根拠が得られていなかったため、敢告可于氏の指摘を承けるかたちで両案を併記した（注26）。今回、北大本と漢牘本との本文の対応関係を分析した結果、筆者が最初に提起した第二案の妥当性をあらためて裏付けることができた。次にその根拠を述べよう。

なお以下に掲げるテキストは、漢牘本（五十五章本）の分章に従い、漢牘本に北大本の本文を組み込んだもので、北大本の本文には傍線と竹簡編号（算用数字）を付した。また、本文中の記号は、基本的に北大本原釈および漢牘本原釈を踏襲し、北大本の分章を以下の記号によって表示した。

《》……北大本に残存する章題（章の冒頭二字）にあたる本文。
〈〉……漢牘本との対応から推定される北大本の章題にあたる本文。
【】……北大本に残存する章末尾の章字数。
『』……漢牘本との対応から推定される北大本の章末尾の章字数。

まず漢牘本原釈第四二、原釈第四三甲と北大本との関係を示す。

原釈第四二

銷錮號堵、尋尺寸咫。密普諫敦、讀飾忝璽。瘧斷痕痔、
膩僞縏檠。淺汙盱復、[39]季孟端墀。罷卹□□、□□銳□虽（注27）。
驕獌貘麤、麃欶朖羋。[38]娓殽讋姊、蠻賦（注28）趍恚。魁裛姊再、

原釈第四三甲

籉輩輎解。姎婡點媿、[40]督媻嬬媞。頫壞蠉虢、廅序戌講。
癟效姁臥、滌雔鷺赻。[41]嫥膞姚淦、滄𠂤起□（注29）。□帅□臺、
裂□今是。仜□奏斬、𣏌誘黨侶。池？□𠂤□、𠂤洛□□□。

敢告可于氏（第一案）に従えば、第卅九から第卅二までの本文は、次のようになる。

第卅九

盍慮黿猚、狗獳麛鼾。媥鰭嫂銳、斟掇營謱。觡聊脯（注30）鼛、
級絇笠緛。[66+22+23]表裹豁？𠂤、𠂤貝翰旄旌。濩膹移惑、短篤翼□。
何藺梟既、摩嬐婚瞢。魁鉅圜艫、與瀕庾請。【百五十二】[67]《齋購》件妖、

第卅（漢牘本缺）

羨櫰杪柴。箸涎縞給、勸怖樈耔。某枏早蠸、[42]窴椅姘鮭。
戾弇焉宛、郃簍埒畦。狛賜漾榮、蠶繅屐庳。[43]□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、□□□□。

第卅一（原釈第四二）

銷錮號堵、尋尺寸咫。密普諫敦、讀飾忝璽。瘧斷痕痔、
膩僞縏檠。淺汙盱復、[39]季孟端墀。罷卹□□、□□銳□虽。
驕獌貘麤、麃欶朖羋。[38]娓殽讋姊、蠻賦趍恚。魁裛姊再、

第卅二（原釈第四三甲）

籉輩輎解。姎婡點媿、[40]督媻嬬媞。頫壞蠉虢、廅序戌講。
癟效姁臥、滌雔鷺赻。[41]嫥膞姚淦、滄𠂤起□。□帅□臺、
裂□今是。仜□奏斬、𣏌誘黨侶。池？□𠂤□、𠂤洛□□□。

漢牘本第卅九第十五句から第卅第九句までの本文に対応する北大本簡42—簡43と、漢牘本第卅一第三句から第卅二第七句までの本文に対応する北大本簡39—残缺（三句半）＋簡38（一句半）—簡40—簡41とは、漢牘本との本文の対応位置が異なることから（前者：第五句～次行第四句、後者：第三句～次行第二句）、前者は《齋購》章に属するのに対して、後者は《齋購》章に続く別の章に属したことが知られる。従って北大本の書写形式から、簡39の前方部（直前とは限らない）には、簡首に章題を標記した二簡分の竹簡が存在し、少なくとも簡39の前の網掛けをした二簡分の本文（十句四十字）は、簡39と同一章に属することが確実である。

ところがこの場合、北大本簡43の第四・五句「狛賜漾榮、蠶繅屐庳」が、《齋購》章と後続の簡39該当章との二つの章に重複し、しかも《齋購》章の

章字数は四十字以下となるため、第一案は成り立たない。

一方、第二案に従った場合は、北大本簡39が属する章の冒頭句は、以下のごとく、本文未見の第卌二の第八句に位置し（注31）、前後の章における本文の関係とも矛盾しない。

第卅九

盍盧龜猋、狗獳麤辭。媥鰿嫂鋭、斟掇謍讂。觡聊脯鼛、
級絇笠綷。66+22+23 表裏聆□其、□貝翰旄旌。濩艭移惑、短篤翼□。
何藺梟既、壄嬐婧謍。魁鉅圜艫、與瀕庾請。【百五十二】67《齎購》件妖、

第卌（漢牘本缺）

羣橾杪柴。箸涎縞給、勸怖樈耟。某柵早蠸、42 寞椅姘觟。
戾弇焉宛、郃簍埒畦。狛鵑謙榮、蠶繅屣庳。43 □□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□、

第卌一（漢牘本缺）

□□□□、□□□□。□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□。
□□□□、□□□□。□□□□。□□□□、

第卌二（漢牘本缺）

□□□□。□□□□、□□□□。□□□□。
□□□□、□□□□。〖百五十二〗〈□□〉□□、□□□□。□□□□、
□□□□。□□□□、□□□□。□□□□。

第卌三（原釈第四二）

銷錮號堵、尋尺寸咫。密普諫敦、讀飾忝壅。瘧斷瘀痟、
膩僞檠檠。淺汙盱復、39 季孟諨墐。罷卻□□、□□鋭虽。
驕獌貘麤、麃欶朖羋。38 娓殽嚮姝、蠻賊趍恚。鞁袶姊再、

第卌四（原釈第四三甲）

篹暈輲解。姎婶點媿、40 督媻嬬媞。頫壞蠉虢、廅序戌譋。
癟效婟臥、滌雔鷺赳。41 嫥膊姚淦、滄𠂤起□。□冲□妻、
裂□今是。〖百卅六〗〈仜□〉奏斬、□大誘黨侶。池？□令□、□洛□□□。

第卌五（原釈第三五乙）

奚避翦乖、渭巨讒詈。茸隲檢凡、掌箴秉乖。見龜幾罋、
遴遒遠迖。飢渴止養、煮餈召橦。幅紕縉緑、褭帚裼柢（注32）。
郵寺畿乖、沐茞像脂。蓄灥穢豬、煩非錢雔。魂恙公旦、

第卌六

加酌覃羝。放赦亦錯、箠苻編維。稼茭助匹、崔鐀右□。
詢駙譴員、芊種穀多。廠踵煖釘、哭堄由蜫。刑窅鈎姪、
胠灰蕈迷。牾域邸造、肂穀殏耆。候騎淳沮、決議篇稽。

第卌七

嫷欺蒙期、44 耒旬叅氐。【百卌四】45《闊錯》麓葆、堂據趕等。裞鬼隃闡、
鈐鏑閏悝。騁虧劾枸、12 蹌漬郅鄙。祁紿鐔幅、芒隒偏有。
泫沄孃姪、髽弟絰枲。13 阝𠂤□□、□□□□。□□□〔舉〕、

これにより、先に提示した二案のうち、

第二案　原釈第四二→第卌三、原釈第四三甲→第卌四

の妥当性が裏付けられる。

以上、本稿では、北大本と漢牘本との本文の対応関係を明らかにし、その結果を踏まえて、前稿で保留した章序の修正に関する新たな根拠を提示した。別稿では、本稿の検討結果にもとづき、北大本の分章の復原を試みることとしたい。

注

（1）『漢志』は、六芸略・小学の書目に「蒼頡一篇」を挙げて、「上七章、秦丞相李斯作。爰歷六章、車府令趙高作。博學七章、太史令胡母敬作」と注し、さらに小序のなかで「蒼頡七章者、秦丞相李斯所作也。爰歷六章者、車府令趙高所作也。博學七章者、太史令胡母敬所作也。文字多取史籀篇、而篆體復頗異。所謂秦篆者也。（中略）漢興、閭里書師合蒼頡・爰歷・博學三篇、斷六十字以爲一章、凡五十五章、幷爲蒼頡篇」という。

（2）拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（『島根大学教育学部紀要』第五十四巻（人文・社会科学）、二〇二一年二月、第四一～五〇頁）。邦文版発表後に、白雨田氏の翻訳による中文版「《蒼頡篇》的押韻与章序」（『簡牘学研究』第十一輯、二〇二一年十二月）を発表した。

（3）北京大学出土文献研究所編（朱鳳瀚編撰）『北京大学蔵西漢竹書［壹］』（上海古籍出版社、二〇一五年九月、以下、『北大壹』と略記）。また、北大本原釈以後に発表された先学の研究にもとづく釈文の補訂は、劉婉玲『出土《蒼頡篇》文本整理及字表 上編』（吉林大学碩士学位論文（指導教師：馮勝君教授）、二〇一八年五月）に従い、すでに本書に引用されている先行研究については、原則として注記を省略した。なお本書の閲読に際して、崎川隆教授（吉林大学古籍研究所）よりご高配を賜った。記して感謝の意を表する。

（4）劉桓編著『新見漢牘《蒼頡篇》《史篇》校釈』（中華書局、二〇一九年六月、以下、『校釈』と略記）

（5）拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（前掲注2）

（6）筆者の統計によれば、現時点で『蒼頡篇』の板として確認されるのは四十七枚（残缺も含む）である。

（7）ただし、第廿三板（原釈第四三乙）は例外的に、各行四句半の十八字、三行で合計五十四字であった形跡が認められる。第廿三板の第一行および第二行は、残缺して末尾の四字句の状況を確認できないが、第三行末尾は完存しており、これを見ると末尾句は前半の「端直」の二字で終わり、北大本との対応関係から知られる後半の「準繩」の二字は書写されていない。各行は、他の板（章）と同様各列を横に揃える形式で書写されているが、他の板に比べて字間がやや広く、残存する文字の位置関係から、第一行および第二行も、第三行と同様、末尾句は前半の二字のみであったと推定される。こうした状況を踏まえれば、漢牘本の書写における単なる誤脱とは考えにくく、すでにもとになったテキストの段階で、各行末にあたる第五句、第十句、第十五句の後半二字が失われた本文であった可能性も考慮される。

（8）北大本と漢牘本との本文の対応関係については、『校釈』の各板（章）の【説明】を参照。ただし、漢牘本第廿九に対応する北大本簡31は白軍鵬「漢牘本《蒼頡篇》読後」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇一九年十二月二十六日）に従い、漢牘本章序不明：原釈第四〇（乙）に対応する北大本簡74は私見により、新たに補った。

（9）漢牘本第四の原釈に対して、以下の校訂を加えた。

・第一行、第二行、第三行の末字を、原釈はそれぞれ「載」、「〔頵〕」、「〔珥〕」とするが、図版によれば「載」については文字が薄れて字形を把握しがたく、「〔頵〕」、「〔珥〕」については板の缺失により推定不能であることから、いずれも「□」とした。

・第三行、第四句第一字を原釈は「曝」とするが、張伝官「新見漢牘蒙書三種校読筆記（四十四則）」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇二〇年一月六日）に従い「蠃」に改めた。

・第三行、第四句第二字を原釈は「茖」とするが、図版によれば「艹」の右下に「卜」のごとき痕跡が認められることから、私見により北大本と同じ「蓉」に改めた。

・第三行、第四句第五字を原釈は「柔」とし、第五句第二字を原釈は「娟（同「媚」）」

とするが、白軍鵬「漢牘本《蒼頡篇》読後」（前掲注8）に従い、それぞれ「黑」、「媚」に改めた。

（10）①について劉桓氏は、漢牘本の「開」は前漢景帝の避諱による変改にかかり、北大本の年代が漢牘本よりも早いことの証拠であると述べている（『校釈』第一七・一九頁）。

（11）陸希馮「関於《北京大学蔵西漢竹書［壹］》釈文注釈的幾点意見」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇一五年十一月十七日）

（12）王先虎「北大蔵西漢竹書《蒼頡篇》七七号残簡試補」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇二〇年八月十四日）

（13）拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（前掲注2）第五〇頁の注19参照。

（14）整理者は「慕」を魚部字とする（『校釈』第二三九頁）。

（15）ただし北大本簡77の検討結果は、前稿で待考とした原釈「慕」の妥当性を直ちに裏付けるものではなく、当該字が「慕」字以外の「莫」を声符とする鐸部あるいは魚部の押韻字である可能性については、なお考慮の余地がある。

（16）このうち第廿二、第廿八、第卅二の三章については、原釈第一八甲、原釈第四〇（乙）のいずれかが該当すると見なされる。この点については拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（前掲注2）参照。

（17）秦樺林「北大蔵西漢簡『《蒼頡篇》札記（一）』（簡帛網、二〇一五年十一月十四日）、胡平生「読《蒼》札記（三）」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇一五年十二月二十三日）

（18）漢牘本原釈は「更」とするが、図版によれば字迹が薄れて字形を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同板（章）は「爰歷」に属することから、「更」（陽部）とは別の魚部または鐸部に属する文字と推定されるが、現時点では釈読が困難であるため「□」とした。

（19）漢牘本原釈は「舐」（支部）とするが、図版によれば字迹が薄れて字形を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同板（章）は「爰歷」に属することから、「舐」とは別の魚部または鐸部に属する文字と推定される。ここでは一案として「魚」（魚部）とした。

（20）北大本と五十五章本との分章形態上の先後関係については、拙稿「漢簡『蒼頡篇』研究―分章形態を中心として―」（『第四回日中学者中国古代史論壇論文集 中国新出資料学の展開』汲古書院、二〇一三年八月、第一七八～一九二頁）参照。

（21）白軍鵬「漢牘本《蒼頡篇》読後」（前掲注8）

（22）敢告可于「漢牘《蒼頡篇》考釈、対読与章序研究」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇二〇年八月十六日）

（23）漢牘本原釈は「課」とするが、張伝官「新見漢牘蒙書三種校読筆記（四十四則）」（前掲注9）に従い「謀」に改めた。

（24）拙稿「漢牘《蒼頡篇》的押韻与章次」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇二〇年六月二十七日）

（25）敢告可于「漢牘《蒼頡篇》考釈、対読与章序研究」（前掲注22）

（26）拙稿「『蒼頡篇』の押韻と章序」（前掲注2）

（27）漢牘本原釈は「蜀」とする。図版によれば下部の「虫」は確認できるが、上部の形体は把握しがたいことから「□虫」とした。当該字は韻脚にあたり、「虫」を含む支部または支部と合韻の関係をもつ韻部に属する文字と推定される。

（28）北大本原釈は「□」とするが、張伝官「漢簡牘《蒼頡篇》校読零札」（復旦大学出土文献与古文字研究中心網、二〇二〇年八月十六日）に従い、漢牘本原釈第四二により左偏の「目」を補った。

（29）漢牘本原釈は「赴」とする。図版によれば字迹が薄れて字形を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同板（章）は「博学」に属し、同章中の他の押韻字との関連から、「赴」（屋部）とは別の支部または支部と合韻の関係をもつ韻部に属する文字と推定されるが、現時点では釈読が困難であるため「□」とした。

（30）北大本の当該字は右旁の上部を缺失するが、漢牘本原釈第三九（『校釈』第三九頁）により「脯」字であることが知られる。

（31）この点については、別稿において詳細に論ずる予定である。

（32）漢牘本原釈は「裎」とするが、図版によれば字迹が薄れて字形を把握しがたい。当該字は韻脚にあたり、同板（章）は「博学」に属し、同章中の他の押韻字および同句中の字義との関連から、「裎」（耕部）ではなく「祗」（脂部）と推定される。

【附記】

本稿は、第七十三回中国出土文献研究会（オンライン会議・二〇二二年二月十九日～二十日）における筆者の発表「北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章復原―『漢書』芸文志所載二十章本考―」の一部をまとめたものである。また本稿は、ＪＳＰＳ科研費19H01193（研究代表者 湯浅邦弘教授〈大阪大学〉）の助成による研究成果の一部である。

福田　哲之（ふくだ・てつゆき）

一九五九年生まれ。島根大学学術研究院教育学系教授。専門は中国文字学・書道史。著書に『説文以前小学書の研究』（創文社、二〇〇四年十二月）、主要論文に「北京大学蔵漢簡《蒼頡篇》的綴連復原」白雨田訳（『出土文献与古文字研究』第八輯、二〇一九年十一月）、「《蒼頡篇》的押韻与章序」白雨田訳（『簡牘学研究』第十一輯、二〇二一年十二月）など。

［別表］漢牘本と北大本との対応一覧表

漢牘本	北大本
第一　第一句～「蒼頡」	
第二（原釈『史篇』一第二）	
第三	……簡1―簡2
第四	簡3―簡4―簡5
第五	簡6―簡7―簡8―簡9
第六	簡9―簡10―簡11……
第七	
第八［漢牘本缺］	
第九［漢牘本缺］	
第十（原釈第五四）	……簡65……
第十一（原釈第一一乙）	簡46―簡47―簡48
第十二	簡49―簡50―簡51
第十三	簡52―簡53―簡54―簡55
第十四	簡55……
第十五	
第十六	
第十七（原釈失序号第四）	……簡63
第十八（原釈第一八乙）	簡63―簡64―簡56―簡57
第十九	簡57―簡58―簡59―簡60―簡61
第廿（原釈第一〇）第十四句～「爰歷」	簡61―簡62……
第廿一（原釈第一一甲）	
第廿二	

第廿三（原釈第四三乙）	……簡34
第廿四（原釈失序号第一）	……簡24―簡25
第廿五（原釈第八）	簡26―簡27―簡28―簡29
第廿六	簡29―簡30……
第廿七［漢牘本缺］	
第廿八	
第廿九	……簡31―缺簡―簡32＊
第卅	簡32―簡33―簡35―簡36
第卅一	簡36―簡37……
第卅二	
第卅三　第七句～「博学」	
第卅四	……簡73―缺簡―簡71
第卅五（原釈第三五甲）［漢牘本缺］	簡71―簡72―簡68―簡69
第卅六	簡69―簡70……
第卅七	
第卅八	……簡76……
第卅九	……簡66＋22＋23―缺簡―簡67―簡42
第卅（原釈第四〇甲）［漢牘本缺］	簡42―簡43……
第卅一［漢牘本缺］	
第卅二［漢牘本缺］	
第卅三（原釈第四二）	……簡39―簡38―簡40
第卅四（原釈第四三甲）	簡40―簡41……
第卅五（原釈第三五乙）	
第卅六	……簡44

第卅七	簡44―簡45―簡12―簡13……
第卅八	
第卅九	……簡16
第五十	簡17―簡18……
第五十一	
第五十二	……簡14―簡15―簡20
第五十三（原釈第五三甲）	簡20―簡21……
第五十四（原釈第二四）	……簡19……
第五十五（原釈第五三乙）	
章序不明：原釈第一八甲＊＊	
章序不明：原釈第四〇（乙）＊＊	簡74……簡75……

＊　前稿（前掲注2）では漢牘本第廿九に対応する北大本を「簡31―簡32」としたが、敢告可于「漢牘《蒼頡篇》考釈、対読与章序研究」（前掲注22）が指摘するごとく「簡31―缺簡―簡32」とするのが正しい。

＊＊前稿で述べたごとく、原釈第一八甲、原釈第四〇（乙）については、章序を確定し得ないが、両板とも奇数句の句末字が押韻し、押韻字は魚部に属することから、「爰歴」中の偶数章であることが知られる。現時点においてこの条件にあてはまるのは、第廿二、第廿八、第卅二の三章であり、原釈第一八甲、原釈第四〇（乙）は、この三章のうちのいずれかに該当すると見なされる。原釈第一八甲の図版を見ると、板首の章数の部分は薄れて字迹を確認できないが、かすかに左右の払いのごとき痕跡をうかがい得るようである。あるいは原釈はこれにもとづき該板の章数を「一八」としたか、とも想像されるが、仮に「八」字であれば、原釈第一八は第廿八と推定される。